

マタイ福音書講話（2）

マタイ 1 章 18～24 節【イエス・キリストの誕生】

イエス様の降誕物語はマタイ福音書とルカ福音書だけに出て来ます。ルカ福音書には天使ガブリエルによる「マリアへの受胎告知」が書かれていますが、マタイ福音書では夢の中で現れた天使による「ヨセフへの受胎告知」が書かれています。マタイはヨセフを中心として語っています。

18 節「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。」

「イエス・キリスト」という名称を使うのはマタイ福音書の中では、この 1 節と 18 節だけです。キリストとはメシアのギリシャ語訳であって「救い主」という意味です。マタイは最初からイエス様が救い主であるという信仰をもってこの福音書を書いています。

18～19 節「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」ここでは「夫ヨセフ」と書いていますが、二人はまだ婚約中でした。しかし当時の習慣では婚約中であっても、すでに法的には「夫婦」とみなされていました。ヨセフは「正しい人」であったとあります。聖書で「正しい人」というのは神を恐れ信じる人のことです。ヨセフは神を信じる人、神の言葉を信じる人だったということです。そんなヨセフに婚約者であるマリアが身ごもったということが伝えられました。自分が相手でないとしたら、他の人との間に関係があったということになります。

しかし聖書は「聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」（18 節）と書いています。単に「身ごもっていることが明らかになった」とは書かれていません。「聖霊によって身ごもっていることが」明らかになったというのです。これをどう解釈するかです。聖霊によって身ごもったという証拠は一体どこにあるのでしょうか。竹取物語ではないですが、お腹が光っているというようなしるしがあれば分かります。でも確かめようがありません。もし聖霊により身ごもったことがはっきりしたのなら、神に選ばれた特別な人ということになり、自分など相応しくないとヨセフは思ったのかもしれないかもしれません。しかし聖霊によって身ごもった証拠はないのですから姦淫によるものかもしれないとヨセフは悩んだかもしれません。結婚する前に赤ちゃんができたこと知れたら、マリアは罰を受けます。姦淫の罪は死罪です。でもマリアが罰せられるのは可哀想です。信仰者でも神のなさる業を疑ってしまうことはいくらでもあります。心が揺れ

動き、悩んだあげく彼が出した答えは「表ざたにしないで、ひそかに縁を切る」というものでした。「決心した」と書いていますから、そうとう心が揺れたのだと思います。結局彼は、マリアを守るためにひそかに縁を切ろうと決心しました。

●降誕祭のイコンを見ると、下の段の左端で、ヨセフが曲がった杖をついた老人の羊飼いに何かを言われている絵が描かれています。これは、「処女が子供を産むはずがない」という言葉を聞いて、ヨセフが迷っている姿なのです。曲がった杖をついた老人の羊飼いは偽の預言者、または悪魔を象徴しています。曲がった杖は、曲がった教えを象徴しています。

20 節「そのように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。』」離縁（離婚と同じ）の決心をしたヨセフに、その夜、天使が夢に現れてこう言いました。「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」。夢というのは当時「神のお告げ」の手段でした。私はここでなぜマリアには天使が姿を現したのに、ヨセフには夢の中なのだろうと思いました。この後、いつもヨセフには夢の中で神の言葉は告げられます。夢とヨセフと聞くとは何か思い出しませんか。創世記の中に出て来る夢を解くエジプトのヨセフ物語です。エジプトのヨセフは兄弟に売られて牢獄にいましたが、夢を解き、そこを出てエジプトを飢饉から救い、エジプトの大臣になりました。彼はキリストの雛型といわれています。キリストは弟子や自分の民から裏切られて殺され地獄に行きましたが、そこを破り、悪魔と死を滅ぼし、人類を命の飢饉から救って神の国の王になったからです。マタイ福音書はユダヤ人に向けて書かれています。ユダヤ人はこれを読んだ時、エジプトのヨセフを思い出したはずです。夢を解いたヨセフのように、神のお告げをしっかりと信じたヨセフに倣って、あなたも神の言葉信じない者ではなく、信じる者となりなさいと勧めているのだと思うのです。

21 節「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」フランシスコ会訳聖書の註には「聖霊によって懐胎したマリアをどう扱ってよいか分からずにいたヨセフは、夢の中で神から、ヨセフがマリアの夫としてイエスの法的な父親であり、その子をイエスと名づける者となってほしいと言われた。」と書いてありました。

22 節「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」マタイはこの出来事が、イザヤの預言書に書かれている「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見

よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」(イザヤ 7:14) の成就であると解釈しました。その昔、アラム、北イスラエル同盟軍がエルサレムの町を攻めてきた時、アハズ王に「神が必ずエルサレムを守るから安心しなさい。神に何かしるしを求めなさい。」と言われたのに対し、アハズは神の言葉など信じられるかといってしるしを求めませんでした。そんな不信仰なアハズに対し、神は一方的にしるしを与えたのです。それが「おとめが身ごもって男の子を産む」というものでした。同じようにマリアが身ごもって男の子を産むことが、神がこの世界を守ることにしるしだとマタイは言うのです。人間が神を信じなくても、神は一方的にイエス様をこの世に送って、必ずこの世を守るのです。イエス様の誕生はそのしるしなのです。

ここで「聖霊によって宿る」ということを考えてみましょう。イエスの誕生とは人間の力ではなくて、神の力によって起こった出来事であるということを教えようとしています。イコンは、額の外からの光（聖霊）がマリアの中に入ったように描いています。この世を超えたものが働いたということを教えているのです。

●「正教会の教義において、処女よりの誕生は、決して間違った処女性の偶像化の結果ではなく、ましてノーマルな人間の性を罪深いものとして嫌悪するためでもありません。また、ある人々が議論しているようにイエスの道徳的な教えに箔をつけることでもありません。処女よりの誕生は、生まれてきた方は、救いを必要とする他のすべての人間と同じような単なる人間であるはずがないという必然として理解されます。世の救い主は、肉体の誕生においてアダムの種族の中の単なる一人ではありえないのです。世を救うために来た救世主は、この世のものであるはずがありません。」（トマス・ホプコ）

●「人の手の加わらない処女地からとられたアダムに似て、処女である女から生まれることになっていたイエスは、こうしてすでにその時、蛇の頭をねらう者としてあらかじめ告げられたのである。…敵を打ち破った方が、女から生まれた人間でなかったとすれば、敵は本当に打ち負かされたとは言えなかったであろう。敵が初めから人間に対して、女を通して人間を支配したからである。だから、主は自らを人の子と公言し、抜き取られたあばら骨から女が造り上げられたあの最初の人間を、自らのうちに再統合したのである。こうして、一人の打ち負かされた人間を通して、わたしたちが死の手中に落ちて行ったのと同様に、打ち勝った一人の人間（イエス）を仲介として、わたしたちはいのちへ

と昇って行くのである。」(2世紀のリヨンのエイレナイオス)

最初のアダムが処女地から創造されたことを信じるなら、第二のアダムと呼ばれるイエス様の身体が処女から創造されることを信じることはそれほど難しい事ではないでしょう。神は最初に行ったことをいつでもおできになるのですから。

もちろんイエス様は、肉体と心と魂をもった他の人類と同じような一人の現実の人間です。しかし、神の言・神の子が人間となったお方です。完全な神でありながら、完全な人間となったお方です。マリアは神人(しんじん)を生んだのです。それゆえ教会は神学的にマリアのことを「生神女(しょうしんじょ)」と呼ぶことに公会議で決めました。ギリシャ語で「テオトコス」といいます。「テオス」は「神」という意味、「トコス」は「生む」という意味です。マリアが生んだのは単なる人で、産んだ後に神の霊が宿って神の子になったのだという説は異端とされました。マリアの胎内で神と人が一体になったのであり、神学的な意味ではマリアは神を宿したことになるのです。

・「初めに言(神の子イエスのこと)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。…言は肉となって、私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(ヨハネ1:1~2、14)

23節『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」

このインマヌエルというのは「神はわれわれと共におられる」という意味です。あなたが信じていようと信じていまいと、神はあなたと共にいるのです。あなたが罪を犯しても、「またおなじことをやってしまった」と人生が失敗の連続だったとしても神はあなたと共におられるのです。

●ある女の子がお父さんに「鉛筆削りを買ってほしい」とねだりました。今まで使っていた鉛筆削りが壊れたからです。お父さんは、その娘と一晩話し合いました。お父さんは「直してあげる」といいますが、女の子は納得しません。そこでお父さんは娘にこう言いました。「この鉛筆削りは治せば治るのだよ。それをお前は捨てるのか。ではもし、お前が病気になった時はどうするのか。治せば治るお前を、捨ててしまってもいいのか。」そうすると女の子は分かってくれて、今に至るまでその鉛筆削りを大切に使っているそうです。

神の愛はこれと同じです。壊れたあなたを見捨てません。あなたを治しに来たのです。だからこの小さな都島教会に神はこだわります。この教会を望まれ、愛します。小さく、貧しく、弱った皆さんを見捨てず、皆さんを忘れず、皆さんを愛します。「神はわれわれと共におられる」とはそういう意味です。

24 節「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。」

「眠りから覚める」という言葉が大事です。「眠る」というのはよく不信仰のこととして言われます。ゲッセマネの園でイエス様が目を覚まして祈っていなさいと言ったのに、弟子たちは皆寝てしまいました。ユダだけがその夜、爛々と目を覚まして、イエス様を売り渡すために走り回っていました。人間は神のことに對して目が閉じ、悪に對しては目が開いているのです。聖書で「目を覚ましていなさい」というのは神の言葉を信じなさいという意味です。だからヨセフは不信仰という眠りから覚め、信仰に目覚めたのです。ヨセフは夢で聞いた神の言葉を単なる夢物語として片づけなかった、その夢に生き続けた、その夢に人生をかけたということなのです。

別の言い方をすれば、ヨセフは信仰によって（神の言葉によって）自分の決心をひっくり返したのです。別の決心をしたということなのです。人間は何かを行う時、そう確信など得られるものではありません。理由もよく分からない、未来も分からないからです。それでも決めなければならない時があります。人生は決断の連続です。結婚も信仰も洗礼も決断です。決めなければ前に進むことは出来ません。だから人は必ず自分で何かを決めています。洗礼を受けない人は、今は受けないと決めているのです。ただ私たちは、神の言葉で決めなさいと言われていたのです。ヨセフも心の底から納得したわけではないと思います。「もしかしてあれは空耳だったかも、あれは自分の声だったかもしれない」ということもあったかもしれませんが、それでもヨセフは「決心した」のです。神の言葉を信じてみよう、そしてイエスの父親になろうと決心したのです。私たちも同じです。クリスマスの物語は、このヨセフの人間的な正しさ、ヨセフの人間的な優しさを越えた出来事、ヨセフの正しい決心をくつがえす出来事だったということです。私たちは時には自分の正しさを越えて、神の言葉に動かされなければなりません。聖霊は、神の言葉を信じさせる力があるのです。人間の正しさを越えさせるものなのです。クリスマスというのは聖霊によって自分が決めた判断や決心が変えられる時でなければならないのです。

私は今日、皆さんに聖書から夢を解き明かしました。聖堂から出たら現実の世界が待っています。夢と現実には挟まれて、どちらを選びますか。現実の世界は厳しく夢がありません。待っているのは絶望です。神の夢は心地よいです。希望があります。さあ、何を怖がっているのですか。恐れてはなりません。この神の夢のような言葉を信じて、ヨセフのように決心しなさい。ヨセフが妻マリアを受け入れたように、キリストを受け入れなさい。神のあなたへの愛の言葉を信じて受け入れなさい。その時、あなたは、あなたと共におられる神を目で

見ることが出来るのです。